

世界遺産
登録決定！

「飛鳥・藤原の宮都」と 関西大学が紡いできた物語



▲高松塚古墳発掘調査中の網干善教助教授(当時)と文学部考古学研究室の学生・大学院生(1972年)

❖「関西大学考古学」の原点・黎明期



写真提供: 共同通信社

●末永雅雄 名誉教授

関西大学と明日香村との関係は、考古学研究室初代室長で橿原考古学研究所初代所長でもあった末永雅雄名誉教授の時代にさかのぼる。末永教授は1933年に着手した石舞台古墳の調査をはじめとする飛鳥地域の遺跡発掘調査に携わり、1950年に関西大学講師として着任。1952年に文学部史学科教授に就任すると、発掘調査や出土品の整理・分析などの研究を行う考古学研究室を開設した。



石舞台古墳

写真提供: 共同通信社

高松塚古墳発掘調査

1972年3月1日から開始された高松塚古墳発掘調査。3月21日に石槨内部を確認し、極彩色壁画を発見した▶



2026年7月26日、「飛鳥・藤原の宮都」(奈良県明日香村・橿原市・桜井市)が、古代日本の国家形成の過程を今に伝える遺産群として高く評価され、国内22件目となるユネスコ世界文化遺産に登録された。飛鳥地域を代表する遺跡である石舞台古墳や高松塚古墳の発掘調査には、関西大学文学部考古学研究室の関係者が長年にわたり携わってきた。初代研究室長だった末永雅雄名誉教授の時代から、70年以上にわたって築かれてきた関西大学と明日香村とのつながりと未来への展望を紹介する。



▲網干善教助教授(左)と発掘調査団の応援に訪れた廣瀬裕三学長(当時)



写真提供: 共同通信社

●網干善教 名誉教授

末永教授の後任となった明日香村出身の網干善教名誉教授は、小学生の頃、石舞台古墳発掘現場の見学をきっかけに考古学への興味を持った。そこで末永教授から「中学生になったらおいで」と声をかけられ、旧制中学時代には実際に末永教授を訪ね、弟子となったという。

なかでも末永教授が指導し、網干教授が中心となって行われた1972年の高松塚古墳発掘調査は、日本考古学史における画期的な出来事となった。約1300年前に描かれた極彩色壁画の発見は社会的な注目を集めただけでなく、それまで考古学的な手法に依拠していた調査に、考古学・歴史学・美術史・化学・地質学など多分野の研究者が連携する総合的な視点を取り入れる契機となった。この発掘調査は、考古学界における学問体系のあり方を問い直し、方法論の多様化や調査の国際化を促した。保存や修復、継承まで見据えたこの取り組みは、現代考古学の方針性に大きな影響を与えたとされる。その後、末永教授と網干教授両名の指導を受けた米田文孝名誉教授も、1986年に始まったインド・サハート遺跡(祇園精舎)における日印共同学術調査など、長年にわたり国内外の遺跡調査に携わった。



発掘中の高松塚古墳



高松塚古墳

写真提供: 共同通信社

❖地域連携・継承と未来への発展

当時、日本中から注目を浴びていた高松塚古墳の発掘現場では、教授や学生らが連日泥だらけになりながら調査・研究に取り組んでいた。その奮闘を目の当たりにした元関西大学教育後援会会長の植田正路氏の寄付により、1975年、明日香村に「関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館」が設立され、現在も研究・教育・社会連携の一大拠点として活用されている。



関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館

長期間におよぶ発掘調査は、その地域の活性化につながる一方、日常生活に不便をもたらすなど、地域にさまざまな影響を及ぼす。「だからこそ、得られた成果を専門家だけのものにせず、きちんと還元して広く活用することが大切です」と各地の調査に携わった米田教授は強く訴える。研究成果の共有や継承のため、関西大学では発掘時の現地説明会や調査概要の発表に加え、公開講座や講演会も積極的に開催している。その代表的な取り組みが、関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館の設立と同じ1975年に始まった「飛鳥史学文学講座」だ。歴史はもちろん、飛鳥の謎、当時の都市計画、仏像や伝統芸能といった幅広いテーマを取り上げ、これまで延べ約11万人が受講するなど、研究成果を社会へ還元する重要な役割を担っている。2026年度も、明日香村村長の森川裕一氏を



高松塚古墳壁画再現展示室



西壁女子群像

はじめ10人以上の講師陣を迎え、全14回の講座を開催している。

70年以上にわたって遺跡研究を軸にした関係を築いてきた関西大学と明日香村は、2006年には、大学で育んできた教育・研究成果を村の活性化やまちづくりに生かすため、明日香村との地域連携に関する協定を締結した。更に、2020年には学術・文化交流に関する覚書を締結し、古墳・遺跡の発掘調査の促進や、世界遺産登録に向けた連携など、多様な取り組みを展開してきた。2020年に考古学研究室の学生たちが中尾山古墳再発掘調査(奈良県明日香村)に参加するなど、現在も地域と連携しながら発掘調査や共同研究を続けている。

世界文化遺産登録を経て世界的な注目が高まる中、関西大学は今後も明日香村と協力しながら、文化遺産の調査・保存・活用を推進し、その価値を次世代へと継承していく。

中尾山古墳発掘調査



▲中尾山古墳再発掘調査に参加する関西大学学生と大学院生(2020年)

関西大学文学部考古学研究室のあゆみ

1952

末永雅雄氏が教授に就任。
文学部に考古学研究室を開設

1972



末永氏の指導のもと
網干氏を中心となって
高松塚古墳の発掘調査

2020

明日香村と学術・文化交流に関する覚書を締結



1967

網干善教氏が
専任講師として着任

2006

明日香村と地域連携に
関する協定を締結

2026

「飛鳥・藤原の宮都」が
世界文化遺産に登録